

追懐の赤い日

雲 海倫

きょう、ひいおばあが死んだ。
スマホのアプリが何度も何度も着信を告げていたけれど、大学の演習授業の発表をしていたから対応できなかった。ひと通りレジュメを読み上げ、簡単な質疑応答を終えると、スマホが再度、短く振動した。メッセージは母からだった。
へおばあちゃんが亡くなりました。とても安らかな顔をしているよ〜
母にとってのおばあ、わたしにとってのひいおばあ、の死に、動揺した。椅子から転げ落ちそうになるのを、マナミに支えられた。大丈夫？と優しく問われたけれど、わたしはきつと虚ろな表情をしているはずで、もちろん何も答えられなかった。
授業を途中で退席することを許された。理由は言わなかった。

美術演習の担当教員は、わたしを心配そうに見つめていた。まだ若い白髪の美しい女性
の先生は、「また来週ね」と言って手を振った。
一九世紀の西洋絵画が、当時の日本の美術に
どのような影響を与えたかを調べて発表する
授業。わたしは、自分の生まれ育ったシマに、
西洋と明治の日本の美術が与えた影響に関心
があったけれど、まだそこまで調べることは
できないでいる。

白髪の先生は、一年生のとき、わたしの描
いた「シマノハマ」と題した白を基調にした
絵を誉めてくれた。沖縄を出て東京の私立の
美大に入学したのは去年の春だった。「シマノ
ハマ」は最初の実作の授業で提出したものだ
った。わたしは、その絵に、ひいおばあの後
姿を描くかどうか最後まで迷っていた。わた
しが小さいころから見て育ったシマの白く美
しい砂浜には違う表情があることを表現した
くて、ひいおばあを借りようと思ったけれど、
標すことはしなかった。

白い無数の砂粒の間へ浸透していく、暗く重たい血の流れ。まだ、わたしにはそれをキヤンパスに思うとおりに刻み付ける力はない。大学を出て、ひとり暮らしの部屋に辿り着くまでの記憶はなかった。バスと私鉄を乗り継ぎ、最寄りの駅で降りると、いつの間にか部屋にいた。狭いワnlーム、起きたときのままの乱雑な掛布団が横たわるベッドに腰かけたとき、窓から差し込む日射しが頬をなでた。四日前に梅雨入りしてから、毎日雨の日だったけれど、今日は晴れていた、というこゝとにいま気がついた。すると、涙があふれ出した。目の奥が痛かった。せき込み、嘔吐した。うなほど、泣きながら、えへへ、というバカな笑い声をあげてみた。

――悲しまなくていいからね。

シマを離れるとき、すでに病床にあったひいおばあが、わたしの手を強く握りながら言

った。なんて優しい目をしているのだろう、

と思った。小学生のころ、縁側に座るひいお

ばあの膝の上から、扶桑花の花を見た記憶が
よみがえってきた。赤い花は綺麗だった。同
時に、戦争で見た、赤い血の追憶を語ってく
れたひいおばあの、あのときの、苦しい表情
も思い出していた。
シマを離れた日、ひいおばあは「長く生き
すぎたさ、おばあは」と笑いながら言い、も
ういちどわたしの手を強く握り締めると「お
ばあに何かあったも、悲しまなくていいから
ね」と告げた。分かっている。分かっている
けれど、その日が本当に来てみると、願いど
おりに、思いどおりになどいくわけがない。
わたしは、冷蔵庫からビールを取り出して、
飲んだ。喉の奥がチクチクと痛んだ。目の前
にひいおばあがいるような気がして、手を伸
ばしたけれど、画材の山に指先が潜り込むだ
けだった。

わたしが生まれ育ったのは東京だった。わ
たしが生まれてから母は文京区や豊島区あた

りを三回ほど引っ越したらしい。
母は、わたしが二歳のときに離婚した。だから、わたしには父の記憶がほとんどない。「でも、そんなもの無いほうがいいわ」と母は言う。定職についてもすぐに辞め、ときどき暴力をふるったという父について、わたしは名前しか知らない。
沖縄出身の母は、高校を卒業して東京に出た。看護の専門学校を卒業して、都内や埼玉の病院に勤めたけれど、結婚して離職した。わたしと二人での生活になってからは、飲食の仕事をしていた。わたし自身が沖縄にルーツがある、というのは何となく分かっていた。
東京には小学校一年生までいた。保育園にたくさん友だちがいたけれど、みな違う学校へ入学した。わたしは母子家庭のひとり娘として、北区の小学校へすすんだ。すぐに友だちもできた。担任の若い先生は、クラスにフクハラが二人いたので、下の名前で私たちを呼んだ。わたしはアイナちゃんと呼ばれた。

もうひとりの子の名前はココロだった。まだ漢字の意味もよく分からないクラスメイトも、ココロちゃんのパクハラが福原であり、わたしのフクハラが普久原であることには気づいていた。お前ら親戚じゃないんだな、とからかわれても、うん、としか言いようがない。わたしはいゆる沖縄の普久原だった。小学校二年生が終わろうとする三月、大きな地震におそわれた。わたしは泣き叫んでいたらしい。木造のアパートは何度も傾き、上下にどすどすいって、わたしを転ばせた。その日、たまたま家にいた母がわたしを抱きしめた。その温もりにつつまれていたら、恐怖心は消えた。沖縄に移住を決めるのに時間はかからなかった。母は、原発事故の処理をめぐって不安を抱いていたのだ。看護師時代の友人だったという人たちから、いろいろな話を聞いているうちに、東京に住み続ける理由がなくなっ

まった、と後に聞かされた。

那覇の壺屋にあるちいさなアパートに部屋を借りた。母には兄と妹がいて、彼らが急ぎで伝手をつかって探してくれた部屋だった。ひいおばあの家も近くにあった。わたしは三年生から、沖縄の小学生になったのだった。

学校にはすぐに慣れた。クラスに同じ苗字の普久原さんがいたので、私はアイナと呼ばれた。アイナ、アイナでアイナイナ。東京よりも少しのんびりしている友達たちは、わたしを、あだ名なのに本名よりも長いアイナイナと呼んだ。

母はいくつか仕事を掛け持ちするようになり、帰りが遅くなった。わたしはひいおばあの家へ帰り、母が夜に迎えに来るという生活がはじまった。

もう亡くなっている母の母、つまりわたし祖母の実家である壺屋の家は、絵にかいたような沖縄の家だった。舗装されたきれいな

道路を折れ、でこぼこした石畳の道を行くと、
背の低く少し茶色い、赤瓦の屋根の家がいく
つか並んでいる。大人の背丈ほどの石垣がひ
いおばあに住む家屋を囲み、緑の木々やカラ
フルな花たちが顔を出している。家には縁側
があり、庭に咲く植物を一望できた。ひいお
ばあは、その縁側にすわり、眼鏡をかけて本
や新聞を読んだり、アイパッドを見たりして
いた。

あなただね、お母さんのお母さんの、その
お母さんだよ。

初めて壺屋の家を訪ねた日、母の妹である
マサミさんが丁寧に教えてくれた。お母さん
のお母さんのお母さん。なんだか果てしなく
遠くを指している言葉の響きだったけれど、
目の前のひいおばあは、やさしい笑顔でわた
しの手に触れ、「よく来たね」と言っただけで抱きし
めてくれた。いい匂いがした。それは香水と
か化粧品とかのそれではなく、皮膚を通して
伝わるような、沁み込んでくるような匂いだ

った。母もマサミさんも、ほっとした表情でわたしとひいおばあを見つめていた。ひいおばあの顔には無数の深く固い皺が走っていた。くすんだ白い髪はすっかりしていて、後ろで小さく結ばれていた。目は、一本の線のよう細いんだけど、とてもやわらかい。わたしは、初めて会ったあの日から、何度も何度も彼女に抱擁されている。「おいで」と言われ、庭に咲く花と一緒に見た。チューリップの横に、白いテツポウユリが咲いていた。デイゴの木に咲く赤い花がきれいだった。

「沖縄はきれいな島だよ」

昭和三年生まれだったひいおばあが赤い扶桑花に触れながら静かに言ったのを、なぜだろう、いまでもはつきり覚えている。わたしは花の美しさと、それを見つめる彼女に見とれていた。ふるまいと表情がかわいいひいおばあ。わたしは、ひいおばあと一緒にいるのが楽しみだった。

近所の新垣さんの家の壁にはシーサーやキ
ジムナーのかわいい絵が描かれていた。
小さいころから絵を描くのも見るのも好き
だったわたしは、そのふんわりした絵が気に
入った。新垣さんの家は、普通の住宅だった
けれど、小さな庭の一角に陶器を焼く工房が
あった。数年前に他界した新垣さんの夫の趣
味の部屋だったらしい。絵を描いたり、焼き
物を作るのが好きなやさしい人だったが、肝
臓を悪くして亡くなった。新垣のおばさんは、
その思いを継いで、工房は維持していた。中
学校の美術の先生だった彼女は、毎日、壁の
絵を眺めているわたしに無料で絵画を教えて
くれるようになった。「御近所づきあい」だか
ら気にしないでとわたしの家族には言ってく
れたそうだけど、新垣さんの工房は素敵な教
室となり、わたしの絵の基礎をすべて教えて
くれることになった。
休日、母の運転で島をドライブした。きれ
いな海や山が見えた。その風景を果てしなく

続く青い空が包んでいる。原色の植物たちを
絵にするとき、どう描けばいいのだろう。そ
んなことを考えながらのドライブは楽しかつ
た。

ある日、母は米軍の飛行場の近くにある美
術館へ連れて行ってくれた。そこで見た絵に
わたしは、心を、身体を、わしづかみされた。
赤や黒、深い蒼色がキャンバスを支配する。
たくさんの方が人間が集っているのにそこは沈黙
していた。表情は暗鬱で、もうろうと彷徨い
続ける人々と小さな骨。わたしは目を逸らし
たかった。恐かったからではない、つらかつ
たからだ、と思う。

わたしは、この絵の意味を尋ねたけれど、
母はうまく説明できなかった。

戦争が、この島で、昔、米軍が、たくさん
の兵隊が、殺し合った、日本人、戦争のため、
沖縄の人、兵隊が武器をもって、民間の人
も、戦争で、地上戦で、この島の、地上戦で、
ふつうの人たちが、島の南のほうで、たくさ

ん、人が、たくさんの人が、殺された。
苦しそうに話す母を見ているのがつらかつた。わたしは美術館のカタログを買ってもらった。でも、あの絵は、自分の目で何度も見なければならなかった。わたしはことあるごとに、母や親戚のひとたちに連れて行ってもらい、あの絵を見た。でも、結局、分かんかった。あの絵に描かれているのは誰なのか。あそこに横たわる裸の人は誰なのか、人の上を赤い血が流れる。あの血はもう乾いたのだろうか、いまも留まることなく流れ続けているのか。
わたしは、このシマで本気で絵に取り組みたいと強く思うようになっていた。

ひいおばあは戦争のとき何をしていたの？
小学校の高学年になったころ、わたしは聞いたことがある。六月のその日は、学校が休みだった。アマハジの影になり、縁側に腰かけて外を眺めていたひいおばあは、「うん」と

小さく頷いてわたしを見つめた。
「つらいことだったよ。ひどいことだったさ。
たくさんひとが死んだよ。もう……」
彼女は表情を変えずに、ゆっくりと話した。
「でも、」もう「に続く言葉はなかなか出てこ
なかった。
「大変だったんだね」わたしは言った。
「そうだねえ……。ほら、アイナ、きれいな
サンダンカだね」ひいおばあは庭の花を指さ
して言った。
わたしは本当のことを、もっと詳しく知り
たかった。庭の花なんかどうでもよかった。
と、そのときは思っていた。
新垣のおばさんに、花たちの表情を描くと
いう絵の課題を出された。わたしはひいおば
あ、庭の花と向き合った。遠くで見ると白い
だけの花にも、黄色や青の小さな筋が走って
いる。花粉の色も鮮やかで、集合した色と個
別の色は、まったく違う表情をしていた。花
弁のあつみによって、緑の葉と色の対比に

微かな違いが見て取れた。わたしは、サンダ
ンカなどの赤い花に注目した。

「きれいだね、庭の花」わたしはひいおばあ
に声をかけた。

「自然といっしょに暮らせることはしあわせ
だよ」

「これ、サンダンカだね。繊細な赤い色を
してる。どんなふうに描こうかな」わたしは
言った。

「赤い花は……きれいだね。はかないね」
わたしはそっとひいおばあを見た。眼鏡を
ずらし、庭の花から目を逸らすのがわかった。

わたしは花に視線を戻し、水彩絵の具の色
をこまかく混ぜ合わせた。青や緑や紫と違い、
赤い色だけがうまく調整できなかった。

わたしにとって沖縄とは何だろう。
母の故郷であり、わたしのルーツのある場
所。ひいおばあ家の畳の部屋に鎮座するト
ートーメーには御先祖様の位牌（イーフェー）

があり、見守られている気がする。親族は定期的に集まり、食事をしたり法要をする。北部に住む従妹たちとも仲はいい。那覇の中心を離れると、自然がひろがる。虫が鳴いている。色彩が豊かで、原色に見える。花や鳥たちも、繊細な色調をもっている。東京では聞いたこともない食べ物があり、同級生の話す言葉でさえわからないのがたくさんあった。学校の先生は文化を大切にしなさい、と言う。歴史を学ぶ過程で、沖縄が日本でありながら日本でないことを知るようになった。戦争はつらい、戦争はダメだ、戦争反対。そういう言葉の意味が分かるようになればなるほど、それが生活の深層とかけ離れていることも感じた。わたしは、この島に生きていているから、島の美しさを愛して絵を描きたいと思う。でも、ここにあるのは美しさだけではない。そうでないものが、確かにある。わたしはどうすればいいのだろうか。絵を描

きたいという思いを母は応援してくれた。
中学に入学し、美術部に入った。家族や日
常をテーマに部員たちとたくさん絵を描い
た。一年生のとき地区の優秀賞をもらった。
母とわたしをキャンパスの中心に据え、周囲
に沖縄のマジムンを配置した絵だった。ユー
モアとローカルカラーにあふれている、と評
価された。新垣さんの教えてくれた色彩のお
かげだと思った。
わたしは新垣さんにローカルカラーが何か
尋ねた。地方の色、その土地の特色、根付い
た文化を表出すること。続けて新垣さんは言
った。アイナちゃんの見つめる視線の先の、
その奥にあるものがこの土地のローカルカラ
ーだよ、と。だからただ見るだけでは見えて
こない、目を逸らしては一生たどりつけない
ものだよ、と。
分かったようで分からなかった。でも、分
かろうとしなければいけないとも思った。
中学三年生のとき、今度は地区のコンクー

ルで大賞を受賞できた。わたしが題材にしたのは「ガマ」だった。洞窟の内部を描くことはしなかった。そのころ、図書館で手にした本から学んだ実存という言葉がかっこよく感じていて、だったら実存を出してやろう、という気持ちも働き、事物が存在することそれ自体を絵にしてみた。中学での平和学習やテレビの特集などで知った県内のいくつものガマでの痛ましい出来事を知り描きたいと思っていた。だからこそ、わたしはガマそのものを絵にしたのだ。木々の間から射しこむ明るい白銀の光の奥に無言のままあり続ける洞窟の深い闇。でも、そこは黒く塗りつぶさなかった。裂け目を見つけ、ほしくて黒に濃淡をつけた。わたしは、ガマで起こった歴史を詳しくは知らない。だけれど、もしこの絵で果たすことの出来たものがあるとしたら、それは想像に接続することだった、といまでも思う。

中三の美術の授業で絵を描いた。テーマは確か「家族」だった。

みな楽しそうに筆を走らせていた。わたしも友達と一緒に班をつくって挑戦していた。ユリは弟のだらしない寝姿を、アワワは家族の食卓を、シュウちゃんは離れて暮らす祖父母を描いた。わたしは、縁側に座るひいおばあを描こうと思った。

その数日前のことだった。学校が終わり、新垣さんの工房に寄ってから、夕方、ひいおばあの家を訪ねた。彼女は縁側でうとうとしていたので、わたしは声をかけずに畳の部屋で本を読んでいた。新垣さんに借りた「紅型」の本で、染めるということと色彩を学びなさい、なんて言われたのだと思う。

不意のことだった。

ひいおばあが、声を振り絞るように叫んだのが聞こえた。ギャだったかグワアだったか。

普段からは想像できない、地の底から溢れだしたような声だった。

わたしは驚いて、声もかけられずに、縁側のひいおばあを見つめるしかなかった。
「あれ、来てたね」わたしに気づくと彼女はやさしく微笑んだ。
一緒に暮らしている長男の徳誠さんがのんびりした口調で「また夢見たか」とひいおばあに声をかけた。
「あれ、わかったね」
「もう大丈夫だよ。ほら天気もいいし。なんだか涼しい日だよ、今日は」徳誠さんが言う。
ひいおばあは、風に揺れる庭の植物を眺めながらうんと頷いた。
あの叫び声は夢のせいだという。
九〇歳を過ぎたひいおばあが、ずっとずっと長い間、途切れることなく見続けてきた夢のせいだという。
「アイナ、こっちにおいで」ひいおばあが言った。

中学の制服姿のわたしを、彼女は、あの日、初めてわたしと会ってやさしく触れてくれた

ときと同じように、そっと手をのばして包み込むように、やさしく抱きしめた。ひいおばあさんの口からかすかな声で「アイエナ―」という言葉がもれた。わたしは、彼女の小さな身体に手をまわし、ぎゅっと抱き寄せていた。そんなひいおばあさんの、縁側での姿を描いてみようと思いつつ、まずは、風景を描写してみた。あるとき、彼女は明るいひかりにだけ包まれてはいなかった。だからわたしは、白と黒を対照的に用いて背景を描いた。

すると、同じ美術部で男子生徒の前田が、わたしの座っている椅子を軽く蹴った。

「なに？」

「ガマの真似か？」

「え？」

「お前の描く絵はうざい」前田が言った。気づくと、クラスでいきがっている男子が数人、わたしを囲んで立っていた。

ちょうど先生は職員室に忘れ物を取りに行っている最中だった。

「何がうざいの？」

「偉そうなのがうざいんだよ」

「何言ってるの、おまえ」気の強いシュウチ

ゃんが前田の前に立ちふさがった。

「お前は関係ない、どいてろ」

「じゃあ聞くけど」わたしは言った。「どこが

うざくて偉そうなのか、ちゃんと説明してよ」

「あ？」

「言葉で説明してよ、どこがうざくて偉そうなのか？」

「その態度が偉そうなんだよ」

そう言うと、前田は立ち上がろうとしたわたしの肩を強く押した。バランスをくずして、机と机の間、椅子の背もたれに倒れてこんだ。額に激痛が走った。シュウちゃんとアワワの悲鳴が聞こえた。痛むところに手を触れると、血が流れていた。

「はっ、お前が悪いんだぞ！」前田が言った。

お前が悪いとはどういうことだろう、偉そうでうざいから、わたしは血を流しているの

だろうか。しかも、わたしのどこがどのようなか、このバカは答えもしないし、
答えられもしない。
「アイナイナ、そのまま横になって」ユリ
がわたしの肩に手をまわした。
「ありがとう」わたしは言った。
誰かが呼びに行ったのか、先生が小走りに
教室に戻ってきて、わたしを抱きかかえた。
「何があった！」「まだ若い美術の男性教師は、
わたしの耳元で大声で叫んだ。「普久原、血：
：」
ハンカチで傷口を抑え、保健室へ移動した
後、病院へ搬送された。
「何があった？」という教師にユリたちが説
明している。「他に見た者は？」という問いに、
クラスメイトは興奮しながら口々に適当なこ
とを話していた。
責め立てられている前田は「でも、あいつ
が：：」を終始繰り返すばかりだった。
病院での処置は適切に行われた、これで大

丈夫だからな、傷は残らないそうだからな、
安心しろ、と美術の教師と担任のふたりが何
度も繰り返す。仕事先から呼び出された母が
駆けつけた。
「どうして！」と大きな声をあげる母に、教
師は怪我をした事情を説明しているけど、時
間の無駄だと思った。
「帰る」わたしはそう言って、到着したばか
りの母と一緒に病院を出た。

わたしは志望通りの高校に入学できたけれ
ど、美術部には入らず、新垣のおばさんに絵
について教わった。
その方が実りがあると思った。わたしは自
分を感じ、考え、学びながら、絵を描きたい。
そういうことを目指していきたいと思った。
高校生になってもひいおばあの家は訪れた。
彼女のやさしい表情を見るのは生活の一部に
なっていた。

高校二年になったころ、すでに他界してい

るわたしの祖母の弟が亡くなった。ひいおばあにとつての二人目の息子だ。名護に住んでいるので、葬儀にはひいおばあは欠席した。「死ぬ順番くらい守れ」彼女は言った。母の運転する車にマサミさんと徳誠さんとわたしに乗った。毎日のように顔を合わせるのに、こんな密室で四人になるのは初めてだった。車中では、亡くなった徳満さんの話になった。昭和二二年、一九四七年の生まれだからまだ若い、病気もなかったけれど、脑梗塞では仕方ないなあと、弟の死を悼むように徳誠さんが話す。母とマサミさんも徳満さんの思い出話を語った。

そこで、わたしは初めて知ったのだ。ここににいる全員が、ひいおばあ血がつながっていない、ということ。

ひいおばあは、戦争で家族を亡くし、戦後、数年経ってからわたしの曾祖父にあたる普久原徳貞と出会い結婚した。徳貞は妻を戦後の混乱の中、病気のために亡くし、三人の子供

を男手ひとつで育てていた。見かねた親戚たちの計らいで、ひいおばあと曾祖父は結婚したのだという。昭和二五年のことだった。結婚後、ふたりの間に子供はなかった。壺屋の家に集まる親族は、ひいおばあとは血がつながっていない。そして、ひいおばあは血のつながった家族は、誰もいない。「それがどうかしたか」というのが徳誠さんの感想で、母もマサミさんも、「うん、それがなんか関係あるね?」と言った。ひいおばあは、徳誠さんの母であり、マサミさんや母の祖母であることに何の変わりも替わりもなかった。それは戦後というわたしには想像しきれない長い時間が積み上げた事実そのものなのだ。

わたしは胸の奥が痛んだ。「死ぬ順番くらい守れ」と呟いたひいおばあの想いにちゃんと触れた気がしたからだ。車は山間の道を進んでいく。大きな黒い鳥が羽ばたくのが見えた。

葬儀の席で、親族が挨拶をする。徳満さん

の友人たちがエピソードトークで盛り上がった。友人たちがエピソードトークで盛り上がった。ていた。これが死者へのはなむけなのだろう。みな、目をはらしながら笑っていた。ときどき、ひいおばあの話もでた。頑固で教育熱心だから、徳満さんは学校の先生になるしか道がなかった、と話す徳誠さんは県庁を勤めあげた。わたしの死んだ祖母は看護師だった。みな、勉強をおろそかにするとご飯を抜かれたそうだ。曾祖父は沖縄県が本土復帰を果たしたという一九七二年に、その復帰の日を迎えることなく亡くなっていた。こちらも頑固者で復帰なんて望んでなかったからな、と彼を知る親族たちが話した。ははははは、と笑いながら。わたしは、沖縄の戦後の歴史が語られる場に、初めて身を置いたのかもしれない。人の死を介して、人々が集まり、記憶を掘り出して、歴史が語られ、怒り笑い合う。母が、「大変でしょ」とわたしにそつと声をかけた。「お葬式って、なんだか楽しいね」私が言うと、母は「コラ」と言いながら、やっぱ

り笑っていた。

わたしはひいおばあのことをもっと知りた
いと思った。

縁側に座るひいおばあは、のんびりお茶を
すすりながら、庭の植物に目をやり、ゆっく
りと言葉を選ぶように話をしてくれた。

曾祖父との出会いや、三人の子供の母親に
突然なっってしまったこと、食べるために働き、

子供たちに熱心に教育したことなど。政治の
いたるところに米軍の圧力があつたけれど、

日常生活は平和だった。でもときどき、許せ
ない事件のことを聞くと、包丁を持ってフェ

ンスの前まで駆けていきたいと思った。こっ
ちが犠牲になっっているのに、なんで平気な顔

してフェンスの向こうで日向ぼっこなんかし
てるね、とひいおばあは声を荒げて言った。

本土復帰、沖縄海洋博など歴史的な出来事が
起こるけれど、夫を亡くしたり子供たちが大

学を出て独立したりで、それどころではなか

った。教科書で学ぶような歴史的な出来事の、その日そのとき、ひいおばあは、もちろんいつも通りの生活をしていて、少し時間が経つと、やはり政治がいけない、米軍はいけない、と思いながら、生きていくことが精いっぱいだった。子供たちも結婚して孫が生まれたのは本当に嬉しかった。アイナの母さんもちいさいときは、こんなに可愛くてね。ほら、アイナにそっくりさ。みんな、元気に育ったよ、ほんとうに、よくこんなに育ってくれたよ……、とひいおばあは微笑みながら言った。

戦争が終わった直後の話も聞いた。

収容所に入れられたけど、でも、ほとんどそのころの記憶は……ないねえ。大変だった。日本の兵隊さんはまだどっかに隠れてて、戦う気でいたものだから。狂ってるよ。どうして戦うのさ、誰のために戦うのさ、もう戦争は終わってるんだよ。収容所のなかでみんな、戦争を反省したよ。アメリカの兵隊は、そのときはやさしかったさ。あんなに悪いことを

するとはいいもしなかった。人を人とも思っ
てないのかね。ベトナムだかの戦争がストレ
スだって？ バカいうよ。戦争させてるのは
沖縄じゃないよ。勝手に国がはじめた戦争で
たまったストレスを、何で沖縄で解消しよう
とするのさ。
はあ……。でもね、この島は本当にきれい
な島だよ。アイナ。おばあが生まれたのは首
里の近くさ。石畳があったり、グスクの跡地
の遺構があったり、すごい町だったよ。ブン
カデントウさ。でもね、言葉にすると簡単だ
ね。ブンカデントウ。だって、残ったものを
守ろうとするだけさ、その言葉は。もう消え
てしまったものがこの島にはたくさんあるよ。
習慣や風習だってそうさ。神様に祈る儀式だ
ってもう……。いくつも消えているよ。
長く生きると、話すことはたくさんあるの
に、話すことはいつも同じになるね。
だけれどね、おばあはね、やっぱり、もう……
戦争だけはやだよ。

高校二年生のとき、ホームルームの時間に不思議なアンケートが実施された。三十くらいに見えるまだ若い担任の後藤先生は、教壇に立ち「おい」と皆に声をかけた。

「悪いんだけどな、みんな、ちょっと協力してくれないかあ」と言って、プリントを配布しはじめた。窓際の後ろの席だったわたしのもとに用紙が配られる前に、あちこちから「これ」という声がもれていた。

「先生の通っていた東京の大学にはな、沖縄学研究所というのがあるんだよ。そこで研究員をやってる先生の先輩が、ある研究調査をしているってことで、後輩である僕に白羽の矢が立ったわけ。そこで、まずはこの高校のみんなから始めさせてほしいんだ」後藤先生の配布したプリントにある「怪異」の文字がわたしたちを戸惑わせた。

「先生、怪異ってなに？」

「マジムンのことね？」

「妖怪とかお化けとか、見たことあるかって
アンケートなの？」
クラスの何人かが後藤先生に質問する。
「お前ら、アンケートの要旨と設問を良く読
めえ。これは……」先生が手元のプリントに
視線を向ける。「みんなのおじいさんやおばあ
さんから聞いた、戦争に関する話のアンケー
トで……」
設問の数は多くなかった。家族構成、祖父
母や曾祖父母の有無などに続いて「あなたの
両親・祖父母・曾祖父母といった家族から戦
争の話を聞いたことがあるか」、「沖縄戦で亡
くなった人たちに関する幽霊譚や怪異を聞い
たことがあるか」、「幽霊譚や怪異はあなたの
家族が体験したものか」、「その内容は」とい
うものだったと記憶している。
沖縄で繰り広げられた地上戦ではたくさん
の民間人が亡くなっている。ある畑では、南
瓜を収穫してみると、信じられないほどの大
きさに育っており、それは戦死者が畑の下に

眠っていたからだ、というような話がたくさんあったそうだ。先生の先輩という人は、文
化人類学という研究分野にアンケートの内容
をいかしたいということだった。
クラスメイトたちはざわつきはじめた。コ
ザの街をさまよう幽霊話があるぞ、仲西へー
イヤ耳切坊主は戦争とは関係ないよな、妖怪
はダメなのか、那覇から南部にぬける県道で
は六月の深夜になると大勢の足音が聞こえる
らしいぜ、首里の方にある畑からは赤ん坊の
泣き声が聞こえてくるんだって、などと話が
漏れ聞こえてきた。

わたしは、怪異というのが生者の想いが投
影されたものだ、というのを、大学一年のとき
に本で読んだ。生者からプロジェクションさ
れた死者への願い。それが怪異となって現実
を侵食する。でも、高校生だったわたしたち
は、戦争の犠牲になった人たちをまな板に乗
せて、ああだこうだと、憶測も含めて怪異を
語っていた。アンケート用紙に記入する前に、

クラス中が、幽霊話で盛り上がっていた。
「聞いたことがないなら、ちゃんと聞いたことはないと記すべきです。大騒ぎして笑いにするような話題じゃないでしょう！」クラス委員長が仲村さんが声をあげた。教室が不意に静まり、すぐに小さなざわめきが広がった。

戦後に想像され、創造された怪異は、生き残った人の想いの投影。死者を死者のまま投げ出せない想いが、怪異譚となった。

教室の片隅にいるわたしの手は震えていた。
ひいおばあのことを思い出していたから。
縁側で、頭をもたげ、いつもより慎重に言葉を選びながら、苦しそうに話をしてくれたひいおばあのことを。窓の外に目をやりながら、わたしはあふれ出そうになる涙を必死にこらえていた。

あの日、ひいおばあは、高校生になったわたしの頭をやさしく撫でながら、静かに目を見て戦争のときの話をしてくれた。

戦争のとき、ひいおばあは、あの激戦のあった南部に逃げていた。
アイナ。アイナにもちゃんと言おうね、おばあはね、そのときね、結婚していたんだよ。
相手は幼馴染の気の優しい人だったよ。生まれてすぐに足に障害を負ってね、戦争にはとられなかったけど、あの戦いの中、逃げるのは大変だったよ。それにね……。
庭にはブーゲンビリアの花が咲いていた。
白とピンク、それから鮮やかな赤い花卉が美しかった。

アイナ。おばあはね、アイナの絵が好きさ。
素敵な色だよ、素敵な題材だよ。沖縄といっしょにアイナは生きているね。おばあはね、アイナが大好きさ。

小学校二年生のあの日、初めて沖縄を訪れ、ひいおばあに会った、あの日のままずっと、わたしは彼女のやさしさに包まれている。だから、ひいおばあ戦争の話を聞きながら、暗い雨雲と爆炎の中にいるような気がしている。

たけれど、少しも怖くはなかった。

アイナ。おばあにはね、子供がいたんだよ。

銘苅タイセイ、それがあの子の名前だったね。

那覇にね、初めて空襲があった少し前に生まれた子だった。まだおばあは、一六歳だったよ。かわいくて、まだ毎日泣いてばかりで、おばあとおじい言うことなんか分かるはずもなくてね、でも、頭を撫でると、ぎゅっと笑うのさ。その顔を見るのが、おばあたち夫婦のいちばんの喜びだったよ。

アイナ。戦火が押し寄せ、見知らぬ人たちと南部へ逃げたよ。夫は足を引きずりながら必死に家族を守ってくれた。小さなタイセイは笑い、泣き、眠るのさ。梅雨時だったけど、しばらく晴れが続いていたね。小さな集落にたどり着いたある日、おばあ達家族はそこで休んだよ。他にも集落には数家族いたけれど、みんな避難民で、もとの居住者はもうどこかへ逃げた後だったさ。「大丈夫、日本の兵隊が助けてくれる、怖くないよ」夫は、何度

もおばあにそう言いきかせてくれたさ。
アイナ。あのとき、おばあはタイセイを抱
きしめながら、安心と疲れから、すっと眠っ
てしまったんだね。突然、爆音がしたよ。あ
たりが一気に燃え上がったさ。おばあは吹き
飛んでしまいう自分の身体をどうすることもで
きなかつたのを覚えてる。熱かつたよ、炎が
渦巻きながら天にのぼっていくようだったよ。
意識が戻るのにどれほど時間がかかったろう
ね。うつぶせに倒れていたおばあが顔をあげ
ると、さっきまで休んでいた家屋がつぶれ、
炎が舞い上がっていたさ。
アイナ。おばあは這ったよ。その炎まで。
泣き声が聞こえたからね。庭の奥に倒れてい
る夫に気づいたよ。でももうダメだとすぐに
わかった。だから、せめて息子のもとまで行
きたい、おばあは、赤く燃え広がる炎になど
目もくれずに、泣いているタイセイのところ
へ、這ったよ。
アイナね。人間は受け入れがたいことをど

うすれば受け入れられるのだろうね。タイセイが、もしもタイセイが、この不甲斐ない母親を呪って、怒りのままに、あの赤く赤く燃える炎の中から、おばあを睨みつけてくれていたら……額から血を流して、赤くはれたあの子の顔を見つめながら、立ち上がって助けにも行けない母親を呪ってくれたなら……。

おばあはどんなに楽だったろうね。一緒に、おばあは一緒に死ねたはずなのにね。でも、あの子は、タイセイはね、あの赤い炎に包まれながら、必死に這うおばあの顔を見つけてね……。

タイセイはね、タイセイはこんな母親を見てね……。

ひいおばあの呼吸がひどく乱れた。

アイナ。戦後、生き残ってしまったおばあは心のなかに居つづけるタイセイと生きていくために、もう子供は決してつくらないと決めたんだよ。

苦しそうにしながら、ひいおばあはそう言

った。

庭に咲く扶桑花の赤い花を彼女は見つめた。

すると、乱れた呼吸がおさまった。もうひか
らびて、涙も出ないね。そう言つて、ひいお
ばあは笑つた。笑つたけれど、ひとすじ、涙
が落ちるのがわたしには分かった。
アイナね。お腹が減つたよ。今日はうちで
食べていきなさいね。徳誠に何か美味しいも
のを買つてきてもらおうね。ひいおばあは言
つた。

夕日に照らされた庭の赤い花たちが炎のよ
うに見えた。ひいおばあは話し終えると、小
さく頷いて、ふたたび庭の花たちに目をやつ
た。

へ珍寿のお祝いつて、アイナは知つてる？
おばあちゃん、照れくさそうにしてたけど、
みんなに祝われて喜んでたんだよ
へ本当になにも苦しまずに、大好きな壺屋の
家で、きつと庭を眺めながら息を引き取つた
と思うわ

へおばあちゃんに感謝することしかできないな、わたしは～

母からのメッセージに、へうん～とだけしか返信できなかった。

きょう、ひいおばあが死んだ。

だけど、わたしの中からあなたは消えない。わたしは、きつとこれからも絵を描き続ける。

いつか、わたしの絵に、あなたのことを描いてみたい。そのとき、ひいおばあ、わたしの絵を好きだと言ってくれたあなたには、絵の真ん中で笑っていてほしい。だからわたしは、あなたの見た世界から眼をそむけず寄り添って生きていこうと思う。